

# ユニテ

UNITÉ

## 8



### 目 次

ロマン・ロランの言葉 .....	1
ロマン・ロランと魯迅『阿Q正伝』 ..... 相 浦 杲 訳 .....	2
ロラン＝マルヴィエール往復書簡(4)の2 .....	南大路 振 一 訳 ..... 19
フランス随想50年—その一 .....	宮 本 正 清 ..... 30
ユニテの広場 .....	塚 本 晴 子 ..... 32
友の会だより .....	33
あとがき .....	36
研究所図書目録(1) .....	(付)

日本・ロマン・ロランの友の会編

## ロマン・ロランの言葉

### 『リリュリ』

「『リリュリ』についてあなたに少し御注意したいとおもいます。この作についてあなたが表明された印象は、この作がその皮肉の蔭に極度の悲痛と深刻な苦悩とを蔽いかくしているという点です。この印象は読者の大多数のもっている、或は今後もつ印象であるでしょう。しかしそれを書いていたときに、私を引き立てていた気持にぴったりと合致するものではありません。世界のコミックな光景のなかに、自由な皮肉のなかに、混り物のない、純粋な喜びを汲みとる古い人種たるフランス人、ヴォルテールのフランス人の特殊な精神状態を、他の人々に理解させるのは常に困難なことを私は知っています。しかし私は保証しますが、私が『リリュリ』を書いていたときには、本当に（私の喜びの中には）、少しの悲痛あるいは憂愁メランコリーもなかったのです。私は笑っていましたが、ただそれだけです。それはあなたにとってはじつに奇怪におもわれるかも知れませんが、私は幸福でした。聡明で自由な精神の笑いは（私の人種の偉大な笑う人々にとってもそうだったはずですが）、私にとっては、愉しげに叫びつつ翹のかぎり飛びかける一羽のつばめです。『リリュリ』や『コラブルニヨン』のような作品の音楽的要素を加えてごらん下さい。私がリズムの陶酔にかかりはじめると、どんな心配も消しとんでしまい、私の精神は踊ります」

何故に、ロランはこうした解説をツヴァイクにしなげばならなかったか？ それは、ツヴァイクのように、ロランをふかく敬愛する理解者にとっても、ドイツ的な、すべてを真摯に、重大に、深刻に、悲壮にとろうとする傾向が、ともすれば、フランス人のゴール気質と、明るい、澄みきった、しかも浅くない笑い— 叡智と機智にみちあふれた笑いを、素直に、如実にとらえがたいうらみと危険があることを、ロランは知り、感じたからである。

宮本 正清

## ロマン・ロランと魯迅『阿Q正伝』

か ほう けん  
戈 宝 権

### 訳者 まえがき

この論文は戈宝権『談《阿Q正伝》的法文訳本——魯迅作品外文訳本書話之三』を翻訳したものである。見出しを原題のままでは出さなかったのは、読者に対して、ロマン・ロランとの関係をはっきりさせた方がよいと考えたからである。この論文は実際、原題から考えられる以上に魯迅『阿Q正伝』とロマン・ロランとの関係を追求しており、ロマン・ロラン研究にとっても役立つような資料を含んでいると思われる。

戈宝権氏のこの論文はもともと『南開大学学報』（1977年第6期）に掲載されたものである。南開大学というのは中華人民共和国の天津市に古くからある大学である。この論文の存在を知ったのは、現香港大学中文系講師の黎活仁氏が在日留学中に私がロマン・ロランと中国に関する資料を集めているのを知って、わざわざコピーをとって送りとどけてくれたからである。私は一読して、これは翻訳・紹介するにあたいする論文だと知った。筆者の戈宝権氏は、戈公振〔1890～1935、中国の有名なジャーナリストで、『中国新聞学史』（中国報学史）の著がある〕氏の甥にあたる人らしい。1912年生まれで江蘇省東台县の人。上海で文芸生活をした後、1935年から37年にかけて『大公報』という新聞の特派員としてソ連に行き、1938年から45年まで重慶で『新華日報』の編集をしているが、中国におけるロシア文学研究者として知られ、オストロフスキイ、ペリンスキイ、フアジェーエフ、シーモノフなどのものの翻訳がある。中華人民共和国になってからは駐ソ大使館の参事官に任命されていたこともある。『ゴゴリと中国』（『文学研究』1958・2）といった論文もあり、ここに訳載する論文を読むと、ロシア文学者というだけではなく、フランスやロマン・ロランについて詳しく調べていて、ロシア語以外の外国語にも通曉しており、広いテーマに関心をもっていることがわかる。

文革中はしばしばイデオロギー過剰を感じさせる論文が多かったが、戈宝権氏のこの論文は手がたく実証的にかかれています、その点に私としては好感をもった。日本のロマン・ロラン研究者にとって興味ぶかい点や、新しい事実の発掘も含まれているので、ここに翻訳・紹介することとした。

(1978. 10. 20 相浦記)

## 『阿Q正伝』のフランス語訳本について

——「魯迅作品の外国語訳本」書話の三——

戈 宝 権

1926年、梁社乾が英語に翻訳した『阿Q正伝』は上海の商務印書館から出版された〔訳注：“The True Story of Ah Q”, translated by George King Leung, Commercial Press, Shanghai, 1926〕。これが『阿Q正伝』がヨーロッパの文字に翻訳された最初の訳本であった。その同じ年に、敬隠漁がフランス語に翻訳した『阿Q正伝』がさらにパリのリーデ〔訳注：Rieder〕書店出版の雑誌『ヨーロッパ』(“Europe”)に発表された。魯迅は1926年12月3日に厦門<sup>アモイ</sup>でかいた『阿Q正伝の成因』という文に次のように述べている。「『阿Q正伝』の訳本については、私は二種類見ただけだ。フランス語のものは8月号の『ヨーロッパ』に載ったが、三分の一にすぎず、省略のあるものだった。英語のものはいいいに訳されているようだが、私は英語がわからないので、なにも言うことはできない」。魯迅は1933年11月5日、Y. K. にあてた手紙の中で、「『阿Q正伝』の“フランス語訳本は敬隠漁訳です”と述べている。同年の12月10日にかいた別の手紙ではさらにフランスの有名作家、ロマン・ロランの『阿Q正伝』に対する批評の言葉にふれ、「ロランの評語は、私は永遠にさがしだすことはできないと思います。訳者の敬隠漁の話では、それは一通の手紙で、彼は創造社に送って……彼らに発表するようたのんだのですが、その時からさっぱり行方がわからなくなりました。このことはもうずい

ぶん時間がたってしまったので、調べようもありません、私はいっそもうさがすことはあるまいと考えています」と述べている。今、これに関するいくつかの問題について述べることにしよう。

### 一. 敬隠漁訳の『阿Q正伝』は8月号の『ヨーロッパ』誌に発表されたのであろうか？

ずっと長い間、われわれは、魯迅自身の言葉にしたがって、敬隠漁がフランス語に翻訳した『阿Q正伝』は1926年8月号の雑誌『ヨーロッパ』に発表されたのであり、「三分の一にすぎず、おまけに“省略のあるものだった”と考えてきた。この問題を明らかにするために、北京図書館からフランス国立図書館に依頼して、『阿Q正伝』を発表した『ヨーロッパ』誌のコピーを入手した。そこではじめてわれわれは、『阿Q正伝』の訳文が8月号の『ヨーロッパ』に発表されたものではなくて、2期に分けて5月号と6月号の誌上に発表されたものであること、訳文はそれぞれちょうど半分づつで、内容はたしかに省略のあるものであること、を知った。

敬隠漁は翻訳にあたって『阿Q正伝』という題名を“La Vie de Ah Qui”と訳し、さらに中国語に再訳したときは『阿Qの一生』（《阿Q的一生活》）、あるいは『阿Qの伝』（《阿Q的伝》）としている。たぶん第一章の『序』は翻訳がやゝ難しく、しかも外国の読者に理解させるのは容易でないからであろう、敬隠漁は第一章を省略してしまい、第二章から翻訳をはじめている。彼は第二章『優勝記略』を第一章に改め、その他の各章をそれにつれて改め、最後の第九章『大団円』を第八章に改め、章名を『再見』（“Au revoir”）に改めている。5月号の第41期『ヨーロッパ』誌は、5月15日出版のものであるが、どういうわけだか、魯迅の名は誤ってLou-Tun（魯東）とされている。この号に発表された訳文は、『阿Q正伝』の前半分の第一章から第五章まで（つまり原作の第二章から第六章まで）である。6月号の第42期『ヨーロッパ』誌は、6月15日出版のものであり、魯迅の名前はここでLou-Siunに改められた。この号に発表されたのは訳文の後半分の第六章から第八章（つまり原作の第七章から第九章まで）である。平均してこの両号の頁数は

それぞれ 18 頁である。

訳者の敬隠漁は訳文の前に短い文をひとつかき、魯迅という人物についての簡単な紹介をおこない、同時に『阿Q正伝』という作品についてこんなふうに述べている。

「彼（魯迅先生）は、まさにこの小説が証明するように、ひとりの傑出した諷刺作家である。……この小説は、すべての有閑の人、有産者、士大夫、ひとことでは、全中国旧社会の一切の欠点——卑劣、虚偽、無知……—に対する辛辣な攻撃である。彼の観察は細緻であり、巧妙である。彼の描写は的確にわが国の地方的色彩を表現しえている。すこしも感傷に流れはしない。それは恋愛小説ではないのである。彼は婦女子の趣味には合わないのだ。」

「これがわれわれのもっとも有名な作家の一人である。」

## 二. 魯迅の敬隠漁との友情および書簡のやりとり

『魯迅日記』によってわれわれが知っているように、敬隠漁は 1926 年 初めから魯迅と通信をはじめ、この通信の関係はずっと 1927 年 10 月までつづいた。現在、敬隠漁が 1926 年 1 月 24 日にフランスのリヨンから魯迅に宛ててかいた最初の手紙を除いては、その他の双方の書信はすべて残されてはいない。しかし今日まで残されている、このただ一通の手紙がわれわれに非常に貴重な資料を提供してくれ、非常に重要な問題を解決してくれる。北京魯迅博物館の承諾をえて、ここにその書信を初公開することとする。

“魯迅先生：

私は身のほどもわきまえず、尊著『阿Q正伝』をフランス語に翻訳してロマン・ロラン先生宛てに送りました。先生はたいへんほめてくれました。先生はこう言いました。「……阿Qの伝は卓越した芸術作品である。その証拠には 2 回目を読むほうが 1 回目よりもずっとすばらしいと感ずる点にある。あの阿Qのみじめな姿はそのまま記憶の中に留まっている……」と（この原文は創造社に送りました）。

ロマン・ロラン先生は、彼と彼の友人たちがやっている雑誌『ヨーロッパ』にも

っていつて載せよう ”と言われました。私が翻訳したとき、(あなたの)ご承認をえませんでした。どうかお許しください。幸いにもまだ世に出ぬうちから、逆にわが同胞のために光彩を添えることになりましたが、このことはあなたにお知らせして(あなたに)お礼を申しあげねばならないことです。私はあなたもまたこのような海外の知己が得られたことをお喜びになることだろうと思います。

“ この海外の知己、不朽の詩人、今年はその彼の生誕 60 年にあたります。彼の友人たちはこの機会に各国の、彼についてのさまざまな論文、伝記、画像……を集めて一冊の専著をつくろうとしています。もしかしたらあなたもご存知かもしれません。ところで、どうか私が真心こめてあなたに、中国のすべてのロマン・ロランについての(新聞、雑誌、写真……彼に賛成するものでも彼に反対するものでも)さまざまな原稿を私に送りとどけてくださるよう、またあなたとあなたの友人たちがロマン・ロランに関する専著を一冊印行して、スイスに送るか、また私から転送することができるようお願いすることをお許しください。人類は、芸術への愛のために、友情のために、ロマン・ロランの中国に対する熱情のために、わが祖国の光栄のために、このような態度を表明すべきだ、と私は考えます。……お騒がせて申訳ございませんでした。どうかご返書を賜りますよう。

敬隠漁 フランス、リヨンより

1926.1.24 ”

敬隠漁のかいたこの手紙は、郵便スタンプによれば、1月26日にリヨンから出されたものである。封筒の表には、「中国北京大学より魯迅先生に転送されたし」とあり、手紙はシベリア経由で2月13日に北京に着いている。魯迅は2月20日の日記に、「李小峰の手紙を入手、敬隠漁のリヨンよりの来函を附す」と記しているが、おそらくこの手紙を指して言ったものと思われる。敬隠漁は手紙の中でまず第一に彼が『阿Q正伝』をフランス語に翻訳したこと、ならびにロマン・ロランのこの小説に対する批評の言葉について述べ、ついでロマン・ロラン60歳の誕生日のこと(ロマン・ロランは1866年に生まれ、1926年1月29日は彼の60歳の誕生日であった)について説明した。魯迅は2月27日の日記に、「敬隠漁に手紙ならび

に『莽原』4冊を送る」と記している。これによれば魯迅は手紙で敬隠漁が『阿Q正伝』を翻訳したことに礼をのべたのかもしれない。敬隠漁の言うところでは「魯迅もこの消息を聞くと、心から喜び、また私の紹介の労に對しいたく感謝しました」。

それからしばらくして、魯迅は敬隠漁の求めに応じ、ロマン・ロランに対して敬意を表するために、三月の頃には日本人の中沢臨川と生田長江の共著になる『ロマン・ロランの英雄主義』（『羅曼羅蘭的真勇主義』）を翻訳して、4月25日出版の『莽原』半月刊、第7・8期の『ロマン・ロラン特集号』に発表した。魯迅は3月16日にかいた後記の中で、「これは『近代思想十六講』の最後の一編で、1915年に出版されている。それゆえ第一次大戦以後の作品には言及していない。しかし叙述が簡明なので、これを訳出した」と述べている。魯迅は4月23日の日記に、「敬隠漁の手紙を受取る」とかき、同じ月の25日には「敬隠漁の手紙に返事をかく」とある。魯迅はおそらく返信の中で彼が「ロマン・ロランの英雄主義」を翻訳したこと、および『莽原』が『ロマン・ロラン特集号』を出版して記念したことを述べたことだろうと思われる。

7月1日になると『魯迅日記』には、「午後敬隠漁の手紙ならびに『ヨーロッパ』一冊を入手す」の記載がある。この『ヨーロッパ』誌は当時の書目ノート（訳註：たぶん魯迅が所蔵本について自分で作成していたノート）には見あたらないし、魯迅の外国語蔵書目録にも見あたらない、たぶん早く遺失してしまったのであろう。時期から考えると、この『ヨーロッパ』誌はたぶん5月号のそれであったのだろう、というのは6月15日出版の6月号の雑誌は郵便を出す時にはたぶんまだ出版されていなかっただろうと思われるからである。魯迅は『阿Q正伝の成因』という文章の中で、「フランス語のものは8月号の『ヨーロッパ』に載った」と述べているが、思うに号数をかきちがえたのであろう。

7月16日の魯迅日記には、「〔李〕小峰を訪問し、彼の家で昼食をとる、また小説等33種類を買い、総計15元であった」とある。つづいて7月27日には、「敬隠漁に手紙を出す」とあるが、どうやらこの手紙は本を送ったことと関係がありそうだ。われわれが知っているように、敬隠漁はこの後で、フランス語で『中国当代短編小説家作品選』（“Anthologie des conteurs chinois modernes”）を編訳し、



1929年にパリのリーデ書店(Rieder)から出版している。その中には、魯迅、茅盾、郁達夫、冰心、落華生、陳煒謨などの人たちの作品、計9編が編訳されている。この“33種”の書物の題名は調べようもないが、訳出された小説から推測すると、魯迅自身の『吶喊』郁達夫の『沈淪』謝冰心の『超人』落華生の『綴網勞蛛』などが含まれていたのであろう。なぜなら訳出された作品はこういった手の数種類の小説集に見られるからである。魯迅の作品は『阿Q正伝』のほかに、さらに『孔乙己』と『故郷』が新たに訳されている。郵送された書物の中には、ほかにロマン・ロランに関する書物・雑誌が含まれていたかもしれない、というのは、当時『小説月報』の6月号がすでにロマン・ロランを記念する特集号を出していたのだから。

1926年の後半期には、たぶん敬隠漁はすでにリヨンからパリに着いていたであろう。魯迅もこの年の9月には北京から厦門に着き、1927年1月にはさらに厦門から広州に行ったが、彼がこの時期に受取った敬隠漁の手紙はすべて許欽文〔訳註：作家(1897—)、北京大学での魯迅の学生〕の四妹(4番目の妹)の許羨蘇(淑卿)が北京から転送してきたものであった。『魯迅日記』1926年12月8日を調べると、「(許)淑卿よりの手紙を受取る、先月29日発、パリよりの敬隠漁の来函および絵葉書4枚を同封す」とある。1927年2月11日には、「午前、敬隠漁の手紙を受取る。去年12月29日パリ発」とある。3月22日には、「午前、(許)淑卿の手紙を受取る、7日発、敬隠漁の手紙を同封す」とある。1927年10月初、魯迅は広州から上海に着いたが、10月15日にはさらに、「敬隠漁の手紙を受取る」とある。これらの手紙の内容はすべて不詳であるし、魯迅が返信を書いたということも見られない。こうして二、三年がたち、1930年2月24日になると、『魯迅日記』の中に、「敬隠漁来たるも、会わず」という言葉があるのを発見する。たぶんこの時、魯迅は敬隠漁の国外での行為がふしだらであることについて耳にしていたのであろう。1929年ごろに敬隠漁はフランスから上海へ帰っている。魯迅のかいた「会わず」とは、おそらく「会えなかった」というのではなくて、「会うのをことわった」または「会いたくない」という意味であっただろう。

さて、ここでもういちど簡単に今わかっている敬隠漁についての状況をいくらか紹介しておいてもよいだろう。

魯迅は1933年11月5日、Y. K.へ出した返信の中で、「フランス語訳本は敬隠漁（四川省の人、スペルはどうつづるのか知りませんが）が訳したのです」と述べている。私は敬隠漁が1926年1月24日に魯迅に宛ててかいた手紙の中に、「魯迅先生、お元気ですか」（「問候魯迅先生」）とかいた名刺が一枚ついているのを発見した。それではじめて私は彼が四川省遂寧の人であることを知った。彼のフランス語での名前はJ.-B. Kin Yn Yuとつづられており、Kinは時にはKynともつづられている。彼は小さいときから成都（一説には成都の近くの彭県）のカトリック教会堂の孤児院で大きくなり、カトリック教のきびしい教育を受け、フランス語とラテン語をしっかりと身につけた。彼の名前の前のJ.-B.というのは、彼のカトリックのクリスチャン・ネームであるJean-Baptisteの省略で、その意味はつまり「洗礼者ヨハネ」ということなのである。20年代の初、彼は上海にきて、徐家匯のカトリックの学校に身を寄せ、いつも北四川路の創造社へ行っていた。彼は郭沫若の小説『函谷関』をフランス語に訳し、『創造季刊』に載せたことがある。この頃から、彼は創作と翻訳の仕事を始め、詩や小説をかいた。彼の作品と翻訳は、大部分が『創造季刊』『創造週報』『創造日』〔訳註：これらはいずれも文学団体「創造社」の機関誌〕や『小説月報』〔訳註：文学団体「文学研究会」の機関誌〕などの刊行物に発表されたし、1925年には小説集『瑪麗』〔訳註：この小説の題名は人名Maryをとっている〕が出版された。郭沫若に励まされて、彼はロマン・ロランの長編小説『ジャン・クリストフ』の翻訳に着手し、またロマン・ロランと手紙のやりとりをした。ロマン・ロランは1924年7月17日に彼の手紙に返事をかいている（その訳文は『小説月報』1925年第一期）。彼が翻訳した『ジャン・クリストフ』の最初の数章については、1926年の『小説月報』に連載された。彼はたぶん1925年前後にフランスへ留学し、前後してリヨンとパリに行ったのだが、一説にはロマン・ロランの学資援助によるものとし、一説にはカトリック教会の援助だとする。彼はスイスのジュネーヴ湖（レマン湖）のほとりの新しき村へ行ってロマン・ロランを訪問し、この家の客となった。その後、ずいぶんとでたらめな行為が多かったので、ロマン・ロランに歓迎されなくなった、と言われている。彼はフランスにいたとき、神経が不正常で、色情狂症にかかっていた。1929年ごろフランスか

ら上海に帰ったが、後に狂疾のため海にはまって死んだ、という。

敬隠漁の訳文は、敬隠漁自身の言うところによれば、ロマン・ロランがかつて、「君の訳文は正確で、流暢で、自然なものだ」(“Votre traduction est correcte, aisée, naturelle.”)という批評の言葉を述べた、という。魯迅も1934年3月24日にかいた手紙の中で、「敬隠漁君のフランス語は人の話では、りっぱなものだそうですが、彼は翻訳に対しては必ずしも真摯ではありません。それは彼の目的がお金もうけで、重訳をすると、まちがいがいっそう多くなるのも当然だからです」と述べている。また私が前に訳文をひとつおとり調べたところ、訳文は朝訳の難しい第一章『序』をカットしただけでなく、その他の各章にもたいい省略のあることを発見した。そのほか、『大団円』の章の結末のところ、阿Qが四年前に山中で一匹の餓えた狼に出会う話がある。彼(阿Q)は、「その狼の目を永久に忘れない。残忍で、しかも臆病な、きらきらと光るまるで二つの鬼火のような目だった。それが遠くの方から彼の皮と肉とをさしつらぬきそうな気がした。いま、又もや、これまでに見たこともない、もっと恐い目を見たのだ。鈍く、しかも鋭利で、彼の言葉を噛みくだいてしまったばかりでなく、彼の皮と肉以外のものまで噛みくだこうとして、いつまでも、近づきもせず遠ざかりもしないで、彼の後についてくるのだ」。この鈍く、しかも鋭利で」という文の後に、敬隠漁は突然、ラテン語の文：“*quaerentes quem devorent*”をつけ加えている。この文はもともとは“*quaerens quem devoret*”〔訳注：これは上の文の単数形〕であり、その意味は、「人間を食うことを求めている野心家」〔訳注：中国語訳文は「尋求吃人的野心者」であるが、このラテン語そのものは「むさぼり食うべき者を求めつつ(ある人間)」というほどの意味〕ということである。敬隠漁はラテン語の成語の引用がたいへんお気に入りであったが、ここでも彼は自分のラテン語の才能をひけらかしたのである。

敬隠漁が翻訳した『阿Q正伝』は、その後さらに1929年に彼が編訳した『中国当代短編小説選』〔訳注：“*Anthologie des conteures chinois modernes*, Rieder, Paris, 1929〕に収められた。1930年、イギリス人のミルズ〔訳注：E. H. F. Millsのこと〕がこの本を英語に翻訳して、『阿Qの悲劇およびその他の現代中国短編小説』〔訳注：“*The Tragedy of Ah Qui and other modern Chinese*”

Stories”, London, 1930]と名づけ、イギリスとアメリカで出版した。思うに、魯迅が手紙の中で述べている、「重訳をするとまちがいがいっそう多くなるのも当然です」という言葉の中の「重訳」とは、おそらくミルズの英訳本をさして言ったものだろうと考えられる。

### 三、ロマン・ロランは魯迅に手紙をかいたか？ 彼は『阿Q正伝』に対してどのような評価をしていたか？

ロマン・ロランは魯迅に手紙をかいたのか。ロマン・ロランは『阿Q正伝』に対してどのような評価をしていたか。これは長年にわたっておおぜいの人たちが非常に関心をもち、同時にまた長いあいだ論争のつづいた問題でもあった。

早く1926年3月2日の『京報副刊』に、栢生のかいた『ロマン・ロラン 魯迅を語る』（『羅曼羅蘭談魯迅』後の文章からすると『ロマン・ロラン 魯迅を評す』という題名でなければならないが、ここは一応原文のままにしておく。）という一文が発表された。その中には次のように述べられている。

「昨日、全飛先生のフランスからの手紙を受取った。この手紙の中に、ロマン・ロランが魯迅先生の『阿Q正伝』を論じたことについての次のような一節があった。

“魯迅先生の『阿Q正伝』は、同学の敬君がフランス語に翻訳し、ロマン・ロラン(Romain Rolland)に送って見てもらいました。ロマン・ロランは非常に称讃しました。そのとき、いろいろと批評の言葉を述べたのですが、残念ながら私はぜんぶは覚えていません。私は二つの言葉を覚えていますが、それは“c'est un art réaliste avéré d'ironie ..... La figure misérable d'AhQ reste toujours dans le souvenir.”（これはひとつの諷刺にみちた、リアリズムの芸術作品である、………阿Qのみじめな顔はいつまでも記憶の中に残っている）というのです。”

この訳文は近く雑誌に発表されることになっていますので、買ってお手もとにお送りしますからご覧ください。しかし訳者の敬君の中国語はあまりよくありませんので、おそらく原文と合わないところがたくさんででしょう。おまけに彼の話では、2、3頁分を省略したとのこと。これでは実際、忠実だとはいえません」

いまわかっているところでは、この文章をかいた栢生というのは、副刊（『京報副刊』）の編集者である孫伏園〔訳注：1894～1966、魯迅と同郷（浙江省紹興県）の人、魯迅が紹興師範学校長をしていた時の学生で、後、北京大学を卒業した。

『晨报副刊』の編集者をしていたとき、その『開心欄』に魯迅の『阿Q正伝』を掲載した。〕のことである。「全飛先生」とは彼の弟の孫福熙のこと、当時フランスのリヨンに留学中で、全飛という名前をつかっていつも『京報副刊』にフランス文学についての文章をかいていた。思うに彼は敬隠漁とは近い知りあいであったにちがいないし、それにいちばん先に敬隠漁のところでロマン・ロランの『阿Q正伝』に対する批評の言葉を聞くことができたであろう。この二つの言葉は敬隠漁が魯迅あてにかいた手紙の中で言っていることと大体において一致している。また彼は敬隠漁が『阿Q正伝』を翻訳したとき、2、3頁分をカットしたと言うのを聞いているが、これは第一章『序』をさして言ったものにちがいない。

栢生のこの短い文章が発表されてからまもなく、敬隠漁はひどく立腹して、「『ロマン・ロラン 魯迅を評す』〔訳注：原文は『羅曼羅蘭評魯迅』、既出のこの文は『羅曼羅蘭談魯迅』で「評」と「談」の一字ちがいであるが、たぶん「評」の方が正しいだろう〕を読んで」という反駁の文章をかいて、1926年5月、上海出版の雑誌『洪水』第五期に載せた。この文章の中で敬隠漁はまず次のように述べた。

「全飛君は私の同学だなどと自称しているが、私は生まれてからこのかたこんな同学と知りあいになるような光栄はもたなかった。私のフランスでの同学は四、五人にすぎず、その中には全飛などという名の人はいない。……私が知っている友人たちにはひとりづつたずねてまわったが、だれひとりとして全飛などという人物を知っている者はなかった。なんと君は人にあらず鬼〔訳注：幽霊、死んだ人のこと〕にあらず、君は鳥有〔訳注：どこにも存在しない、という意味、漢の司馬相如が『子虚賦』をかいて、子虚先生、鳥有先生、亡是公という架空の3人の人物に仮托して問答させたのにもとづく〕であり、君は全非（すべてまちがい。全飛の「飛」と「非」とが同じ発音なので、このように罵った）なのだ」。つづいて彼はこうかいている。「第一に、人間たるもの責任を負うべきだ。あれこれ争いをまきおこすような文章をかくときには、本当の姓名を名乗るだけの度胸がなければならぬ」。「第二に、

他人の訳文や他人の“作品”を批評するのはまことにごりっばなことではあるが、その訳文を読むなり、“作品”を見るなりしてから批評を加えたり、攻撃したりするべきだ。それこそが正しい道理というものであろう。「第三に、みだりにデマをとばしてはならない」。こうして最後に、「『京報』にのったものはデマでしかなく、批評ではない」と述べている。言うまでもなく、敬隠漁も自分のかいたこの文章は「いささか行きすぎたところがある」とみずから認めていた。『洪水』の編集者はこのために按語（作者・編集者などがある文章やことばについて説明したり、考証したりする文章のこと）をかいている。「『ロマン・ロラン 魯迅を評す』という文章は、1926年3月2日の『京報』にのったものである。……原文はごく短い消息の一文であり、栢生君が紹介してくれた全飛という人の一通の手紙である。私がざっと目を通したところでは、べつにとりたててよくないところもないと思う。友だちどうしの手紙のやりとりでは、よく仲間うちを知らせあうものだ。……一隠漁の文章も多くはただの言い争いだけではない、前半部分には怒りにまかせた軽薄な言葉もあるけれども。実はたくさんある、たいして重要でもない言い争いの部分は削りとってしまいましたかったのだが、ここ数日あまりにいそがしくて、しかたなくいつものとおりに出してしまった。この文章の読者が言い争いの部分だけを読まないようにしていただければ幸いである」

この二つの文章が発表されてから、われわれははじめてロマン・ロランの『阿Q正伝』に対する批評のことばを知ったのである。20年代および30年代には、さらになん人かの外国の作家がロマン・ロランの批評のことばについてふれている。たとえば、北京大学で西洋哲学と文学とを教えていたパートレット(R. M. Bartlett)は、1927年にアメリカの雑誌『カレント・ヒストリー』(Current History)の10月号にかいた『中国革命の思想界の指導者たち』という文章の中で魯迅のことを述べている：「私が魯迅に会ったのは1926年の夏で、まだ彼が北京から厦門へ行く前のことであつた。……彼のもっとも著名な『阿Q正伝』はすでにフランス、ロシア、イギリス、ドイツの四つの国の言葉に翻訳されている。フランスの大文学者、ロマン・ロランはこの小説を読んだ後で、“この写実作品は、その中にたくさんの諷刺の言葉をもっている。私はまた永遠に阿Qのあのうれいにみちた顔を忘れることが

できない」と言っている。これは魯迅の小説の中で西洋の言葉に翻訳された唯一の作品である（ここに引用したものは、雑誌『当代』第一巻第一編に発表された石采の訳文による）。魯迅の生前の日本の友人であった増田渉は、1932年に雑誌『改造』4月号にかいた『魯迅伝』〔訳注：魯迅に親炙した増田氏の『魯迅伝』は、同氏の『魯迅の印象』（角川選書）p23～24、p34によれば、魯迅も目を通したものであった。おそらくこの『魯迅伝』は魯迅についての、日本への最初のまとまった紹介であったと考えられる。〕の中でこう述べている。「魯迅の名が国内ばかりでなく、国外に知られるようになったのは彼の『阿Q正伝』が七、八年ばかり前に、仏蘭西に訳されて、それがロマン・ロランの主宰していた雑誌『欧羅巴』に載ってからである。ロマン・ロランはそれに対する感激的批評を支那へ送ったが、……」

〔訳注：増田渉『魯迅伝』は訳者未見であるが、小野忍『外国における魯迅』（岩波書店『魯迅案内』）に、ここと同じ部分の原文が紹介されているのでそれによった〕

アメリカの進歩的作家・記者のエドガー・スノウは1935年、アメリカの雑誌『アジア』〔訳注：ここには英文名が挙げられていない。中国語名は『亜州』としている〕にかいた『魯迅——口語文の大家』〔訳注：中国語原題は『魯迅——白話文的大師』。以下の訳文は中国語より訳出〕という文章で、魯迅が「1921年に発表した諷刺小説『阿Q正伝』は彼の名を全国に有名にさせた。……これは当代の中国人がかき、広く外国語に翻訳された、数すくない作品中の一つである。ロマン・ロランは魯迅の作品についての偉大な讚美者のひとりであり、彼はかつてこの作品に深い感動をおぼえて涙を流したほどだった」。

1936年、魯迅逝世の時になって、（王）鈞初が10月24日、パリの『救国時報』〔訳注：中国共産党がパリで発刊し、国外で抗日宣伝をおこなった機関誌で、1935年12月9日創刊、38年2月10日停刊、152期まで出た〕にかいた『魯迅先生逝世の哀しみ』〔訳注：中国語原題は『魯迅先生逝世哀感』という一文には

「なん年前、『阿Q正伝』がフランス語に翻訳されて出版されたとき、フランス当代の大文豪ロマン・ロランはこれを読んで、そのために涙を流し、さらにすぐれた批評を雑誌『世界』に発表した」と述べている。

抗戦〔訳注：抗日戦争、つまり1937年から1945年までの日中戦争をさす〕が勝

利した後、魯迅生前の親友であった許寿裳〔訳注：1882～1948、魯迅と同郷の人で、ともに日本に留学、後北京大学教授、北京女子高等師範学校長などを歴任した。魯迅についての回想録などの著述がある。〕は1947年、『人間世』第六期にかいた『亡友魯迅印象記』の中の『著作について語る』〔訳注：原題は『雑談著作』〕で、「魯迅の著作は、国際的に早くから有名であった。……彼はまた私にこう話した。ロマン・ロランは敬隠漁のフランス語訳『阿Q正伝』を読んだとき、この諷刺の写実作品は世界的なものだ、フランス大革命の時に阿Qはいた、私はいつまでも阿Qのあの苦しげな顔つきを忘れることができない、と語った。それで口氏は私あての手紙を一通かいて創造社〔訳注：1921年に郭沫若、郁達夫、成仿吾らが組織した、ロマン主義を標榜する文学団体で、後に革命文学に転じた。魯迅らとは一時期対立した〕気付で私に渡してもらおうとしたのだが、私は受取っていない。……〕

これにつづいて郭沫若は1947年8月30日に『一通の手紙の問題』をかいて、許寿裳に対して釈明と訂正とおこなった。

しかし、この問題は結着をみなかった。つい先日、たまたま1961年に香港で出版された『新雨集』に葉靈鳳〔訳注：1904～1975、創造社後期の中心的メンバーであった。1937年以後香港に住みここでなくなった〕のかいた『敬隠漁とロマン・ロランの一通の手紙』というのが載っていたが、その中で、

「敬隠漁という名前を、今では知っている人もたぶんそれほど多くはないはずだ。が彼は新文壇とはなおひとつの重要な関係をもっている。というのは、彼はその後フランスに留学し、中国へ帰ってくるときに、ロマン・ロランが彼に魯迅先生あての一通の手紙を持って行くよう依頼したといわれている。当時、敬隠漁はフランスにいて貧乏でどうにも生活のたてようがなく、帰国することになったのだが、彼の性格は変屈で頑固なものだったし、おまけに神経衰弱にかかっていたために、この手紙は彼によってどこかわからないところへ棄てられてしまい、魯迅先生の手には渡らなかったのである。……はからずも彼が誤って「洪喬」〔訳注：晉の殷羨の字は洪喬と言った。彼が豫章の太守になったとき、人たちが百余通の手紙を彼に托した。洪喬はこの手紙をすっかり河の中に投げすてて、沈むものは自ら沈め、浮かぶものは自ら浮かべ、私は手紙のはこび屋ではない、と言った、という故事にもとずいて、



ここでは敬隠漁を洪喬になぞらえた] になったために、初期の中国新文壇にあらざるもがなのもめごとをひとつつけ加えることになったのである」

上に述べた簡単な紹介をとおして、われわれはロマン・ロランの一通の手紙をめぐる問題がさまざまな論争と紛糾をよびおこしたことを知ることは困難ではない。これらの問題を明らかにするために、わたしたちはフランスの国立図書館に協力し調査方を依頼し、現在、初歩的に次のいくつかの問題を明確にすることができた。

1. ロマン・ロランは魯迅にあてて手紙をかいたのだろうか。

上に引用した少なからぬ文章が、ロマン・ロランの魯迅にあてた一通の手紙の問題をとりあげている。たとえば、許寿裳は魯迅の言葉を回想して、「ロ氏は私あての手紙を一通かいて創造社気付けで私に渡してもらおうとした」と述べ、葉靈鳳は、敬隠漁がフランスから帰るとき誤って「洪喬」になり、ロマン・ロランが彼に托して魯迅に渡そうとした一通の手紙は、「どこかわからないところへ棄てられてしま」ったときえ述べている。しかし今、少なからぬすじみちから明らかになったところでは、ロマン・ロランは直接魯迅にあてて手紙をかいたことはなく、ただ彼の敬隠漁への返信の中で自分の『阿Q正伝』に対する批評の言葉を語ったのであるらしい。このことについては前に初公開した敬隠漁の1926年1月24日付け、魯迅あての手紙の中の言葉、がいちばんよい証明になるだろう。敬隠漁はロマン・ロランの批評の言葉をかいた手紙を創造社あてに送ったのであり、それは1926年初めのことで、それ以後のことではありえないし、なおさら彼が帰国するときにロマン・ロランが彼に托して持ってかえらせたということではありえないだろう。

2. ロマン・ロランの『阿Q正伝』に対する批評の言葉はかつてフランスで公けに発表されたことがあるのだろうか。

(王) 鈞初の回想によれば、ロマン・ロランの『阿Q正伝』に対する批評の言葉は、フランスの雑誌『世界』(“Monde”)に発表されたことがある、と言うのだが、フランス国立図書館に問い合わせたところでは、『ヨーロッパ』にも『世界』にも、ロマン・ロランの『阿Q正伝』に対する批評の言葉は発表されたことがない、という。雑誌『世界』は1928年創刊だから、なおさらその可能性はない。私は以前このことについて王鈞初氏におたずねして、彼がロマン・ロランの批評の言葉をのせた

雑誌『世界』を見たかどうかをきいたところ、王氏の返書では、「私はほかの人がこのことを話しているのを聞いたときに、はっきりとたしかめませんでした。これは私の大変な不注意でした」ということであつた。どうやら彼もまた聞いたのであつて、文字の上の根拠があつたのではないらしい。

### 3. ロマン・ロランは『阿Q正伝』をどう評価していたか。

この問題は伝聞が多いし、またロマン・ロランの敬隠漁にあててかいた返信の原文はないので証拠にできないから、私の考えでは、やはり敬隠漁の1926年1月24日付け、魯迅あての手紙の中の言葉がよりどころとなるだろう。これは栢生の文中に引用された全飛という人の言葉とおおむね一致している。どうやら、全飛の言葉は「全非」〔訳注：すべてまちがい、ということ、飛と非とが同じ発音なのでこう言って敬隠漁がののしった。前出〕ではなさそうだ。この問題を明らかにするために、私は特に当時、敬隠漁といっしょにリヨンに留学していた林如稷氏におたずねしてみた。去年同氏はすでに74歳の高齢で、半身不随、両眼を病んでおられたが、1976年4月20～21日に私の問題にお答えをいただき、また同氏が亡くなられ(1976年12月10日)るすこし前に、私が同氏の返信中の言葉を引用することのご承認をいただいているので、ここにそれを引用して、この論争問題の結着をつけておくことにする。

「ロマン・ロランの『阿Q正伝』に対する批評の言葉の問題については、私の記憶では、敬隠漁はロマン・ロランの返書を私に見せてくれました。ロマン・ロランは手紙の中で、『阿Q正伝』を『ヨーロッパ』に紹介して登載することを決めたとやっているほか、数行の短い批評の言葉を述べていました。“これは諷刺に富んだ一編の現実主義リアリズムの傑作です。阿Qの形象はいつまでも人たちの記憶の中にあるでしょう。……フランス大革命の時に、阿Qに似た農民がいました、……”

敬隠漁のその時の話では、彼がすでにこのことについて短い文章をかいて上海の創造社に送ったこと、その中で主に述べたことは、彼が『阿Q正伝』を翻訳したこと、およびロマン・ロランの手紙の中の彼の訳稿に対する批評の言葉、についてであつた、ということでした。その後、敬隠漁はこの文章が掲載されないので、パリへ出てきてから私に会ったときにも不平をもらしていました。……」

まさに魯迅が言っていたように、「このことはもうずいぶん時間がたってしまつて、調べようもない」のだが、こゝ一、二年来けんめいに調査した結果、すくなくともここ五十年来ははっきりできなかつたいくつかの問題を、特にロマン・ロランが魯迅あてに手紙をかいたかどうか、およびロマン・ロランがどのように『阿Q正伝』を論評していたか、という問題を、かなりはっきりさせることができた。

#### 四、『阿Q正伝』のその他のいくつかのフランス語訳本について

敬隠漁が翻訳した『阿Q正伝』は、フランス語の中ではいちばんはじめの訳本である。1926年の5月、6月に分けて『ヨーロッパ』誌に発表されたほか、さらに1929年に彼が編訳した『中国現代小説家作品選』〔訳注：Anthologie des conteurs chinois modernes, Rieder, 1929〕に収められている。ミルズはつまりこれにもとづいて、1930年に英文に転訳し、1931年にイギリスとアメリカで出版したのである。

1953年にフランス連合出版社はポール・ジャマティ (Paul Jamati) の翻訳した『阿Q正伝』 (“La véritable histoire de Ah Q”) を出版し、この書のはじめにクロード・ロワ (Claude Roy) のかいた序文 (沈鵬年編の『魯迅研究資料編目』では Claude Roy を誤って訳者だとしている) をつけている。この書物の最後には馮雪峰のかいた『阿Q正伝』を論じる文章を訳載している。

1973年、わが国の外文出版社は『阿Q正伝』のフランス語訳本を出版した。1974年に同社が出版した『魯迅短編小説集』 (“Nouvelles choisies”) があるが、その中にも『阿Q正伝』を収めている。

1975年、フランスのパリ大学東亜出版物センターはマルチン・ヴァレット・エメリ (Martine Vallette-Hemery) の翻訳した『阿Q正伝』 (“La Véridique histoire d'AQ”) を出版した。

このほか、1975年フランスの劇団がパリでベルナール・シャルトロー (Bernard chartreux) とジャン・ジュルドイル (Jean Jourdheuil) が魯迅の小説にもとづいて改編した新劇『阿Q』を上演した。

『阿Q正伝』のフランス語訳本が1926年に発表されてからすでに51年になるが、まさにロマン・ロランが語ったように、「これはひとつの、明らかに諷刺をもつところのリアリズムの芸術の傑作なのである」し、「阿Qの哀れな形象はいつまでも人たちの記憶の中にのこるだろう」。

相 浦 晃 訳

## マルヴィーダとロランの往復書簡(4)の2

### Ⅰ ロランからマルヴィーダへ

サレルノにて

1891年2月9日、月曜日の夕方

から10日、火曜日の朝まで

したい友、今夕はしばらくの間落ち着いていますので、あなたに少しばかり書いてみます。ただ、この手紙を書き終わられるほど長くつづきますかどうか——。

ともかく荒波と船酔いを物ともせず、私たちは土曜日にカブリを脱出しました。引き止めたかった宿の主人は、次のようなことを言って私たちに恐れらせようとするのですが無駄でした——「私なら100フランもらったって今日は海には出ないよ。金より生命いのちのほうが大事だからね。」これを聞いて私たちは大笑いしたのです。彼のことばを信用しなかったのですから、私たちに勇気が要るわけはありません。私たちは一隻の小型蒸気ヨットを借り切ってボジターノに向かいました。実際海は大荒れで、しかも逆風でした。ですから私が酔ったこと——3、4時間も酔ったこと

は容易に想像がおつきでしょう。しかし私は片意地にも、この激しく逆巻く波、この生命の湧き立つ美しい海をすばらしいと思いつづけたのです。

ボジターノ到着の折に現われたものは、私がかつて見たもつとも風変りな光景の一つです。あなたがこの不思議な小さい町をご存知かどうか私には分かりません。それは一つの山の懐ふかく抱かれ、二つの前山に挟まれて、デルフォイ<sup>1)</sup>のそれを思わせる巨大な岩塊のふもとにあります。オレンジとレモンの園に立ちならぶ青、薄くれない、白、黄色の小さな家々が形づくる一つの円形劇場です。湾がひじょうに狭く、また奥深いので、町に気付くのは到着の瞬間、まったく突然にです。

—— 私たちの舟の汽笛で町中の人間がどっと浜辺に群がりました。私たちが到着する前に、子供たちが、ズタズタに裂こうと獲物を待ち受ける野獣の群のように、大声でわめくのが遠くから聞こえました。女たちは叫び、男たちは腕を振ります。上陸したかと思うと私たちの一人、一人はたちまち一群の人間に取り巻かれ、彼らは私たちの目をのぞき込み、私たちの声を聞き、私たちと話をしようと懸命で、ずいぶん勿体ぶって私たちを助けようとするのです。銃をもった税関吏たちが、この好奇心の強い集団から出来るだけ私たちを守ってくれました。彼らは私たちがリキュール酒の小グラスで少しばかり元気をつけようとした、コーヒー店の戸口で番をしなければなりません。宿を教えてもらった私たちは、それを探しながら10分ほど狭くて急な段々を登りましたが、背後からは親切な、しかし少々厄介な群がついて来るのです。出会った主人は私たちを、まるで専用ヨットでイタリアを一周する王侯たちのように扱うのですが、少し度がすぎるので私の同行者たちは腹を立て、それが激しい口論になり、私たちは立ち去りました。一行のうち二人は土地の神父のところへ出かけ、残りの者は、二つの石壁の間を無限につづく階段に沿って、自分たちの荷物の上に身を横たえたまま待ちました。頭上には一片の暗い空が見え、そこに小さな星々が淡く光っています。もう夜更けです。私たちは疲れており、頭の中ではまだ海がどよめいています。私たちは口をききませんでした。黒い人影が次々に通りすぎます。一人の気遣いが訳のわからぬ歌を歌い、高笑いするのです。こんなに奇妙な、しかしまた面白い状況におかれて、私たちも気が違うのではないかと自問した次第です。

とうとう私たちははるか下方にランタンが浮かび出るのを見ました。—— 一つ、二つとふえ、やがて行列ができます。迎えが来たのです。私たちは狭くて急な段々を降り、昇り、そしてまた降りました。途中で住民たちに出会いましたが、彼らは皆ランタンをたずさえています。私たちは不格好で今にも倒れそうな家—— 一種の船員宿に着きましたが、そこにはこの土地の二人の名士である神父と薬局店主が来ており、彼らは二人ないし三人用ベットを並べて宿泊設備を整えるといった仕事を熱心に監督しているのです。それから私たちはごく手軽に料理をすませ、賑やかに夕食をとりました—— 時代がかった揺りかごに太った赤ん坊が寝ているその傍で。家中の者が私たちと話をするため入って来ました。私たちは彼らとおしゃべりをし、ポジターノが移民の町であることを聞きました。住民の四分の三はアメリカへ出かけます。祖父はニューヨークで暮したことがあり、息子たちの一人でいま家にいるのはマルセーユで貝商人として5年か6年すごしました。私たちのまわりに群がる子供たちは、いずれアメリカへ行くことになっています。ところで家族は皆たいへん親切で、利口で、正直で、清潔("rara avis")<sup>2)</sup>なのですが、かなり醜いのです。見たところ純粋なイタリア人ではないようです。

翌朝(日曜日)私たちは出発し、海を見下す山羊道をば徒歩でアマルフィに行きました。アマルフィからは馬車でラヴェルロへ。ここを見るのは私には二度目ですが、初めの時にまさる驚嘆でした。<sup>3)</sup>そこを立って私たちは夕刻サレルノに着きました。

今日は12キロばかり内陸に入った山中のラ・カーヴァの修道院<sup>4)</sup>へ行きました。明日私は大好きなベストゥム<sup>5)</sup>を見、ターレントで泊り、そこでアテネへ行く学友たちとは別れます。そして水曜日にはシチリアです—— もレスキラとカリブデイス<sup>6)</sup>が許してくれるなら。こういう次第で私たちは謝肉祭の火曜日はベストゥムで過ごすこととなります。そこで私はアテネ人に仮装して出かけることを提案しました。少なくともドーリス式神殿の調和がかもしだす静けさ、遠くの海のメランコリックなざわめきが私たちを取り巻いてくれるでしょう—— ローマであなたの感覚を麻痺させずにはおかない不自然な騒ぎの代わりに。

したい友! どうかお達者で。私があなたのことをしきりに考えるのと同様に、

私のことを考えて下さい。

心からあなたを愛します。

R・ロラン

『オルシーノ』はいいようにして下さい。あれはあなたのもの——あなただけのものです。もし許されるなら私はあなたに献上するのですが。しかしそれだけの値打ちはありません。

### 注

- 1) 現在のデルフィ。岩の深い裂け目にアポロの神殿があり、巫女による神託で知られていた。
- 2) ラテン語で「珍しい鳥」の意。たとえば白いカラス。転じて一般に「珍奇なもの」、「稀有なこと」。
- 3) ラヴェルロは海拔 300メートルを越える急斜面からアマルフィの海岸を見下す景勝の地。ノルマン・サラセンの遺跡、数々の美しい庭園がある。
- 4) 11世紀に由来する、ベネディクト派の修道院。
- 5) 前6世紀にギリシアのアカイア人が植民したポセイドニア(Poseidonia)の町。その名前は海神ポセイドンに因む。ローマ時代にはパエストゥム(Paestum)と呼ばれた。一群の巨大なドーリス式神殿があり、ローマの詩人たちにより好んで歌われた。
- 6) メッシーナ海峡の岩礁と大渦をギリシア人がそれぞれ女の怪物として表象したもの。よく諺で窮地、厄難をいうのに用いられる。

## Ⅱ ロランからマルヴィーダへ

タオルミーナにて

1891年2月13日、金曜日の夕方から

14日、土曜日の朝まで

<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>  
　　したい友、私は昨日、私たちの夢の国に足を踏み入れました。そしてそれを愛します——少しばかり落着きのない、陶酔する若々しい愛でもって。ただ空はそれほど澄んではいません。雨が降っています。曇りで風があるといった具合です。出発して以来、自然の中でほんとうに澄んだ、清らかな、おだやかな美を味わったことは一日もありません。しかし私の生き生きとした魂は、たとえ自然がそれを恵んでくれなくても、晴朗な平安をとりもどせます。そして濃い雲の背後に山々の調和にみちた平和なたたずまいを見るのです。

　　どこでお別れたかももう覚えていません。たしか最後の手紙はサレルノで書いたと思います。あれからターラントを見ました。ターラントはけっして美しい町ではありませんが、哲学者たちの言い方によれば、美しい町の「可能性」をなしています。私はターラントからレッジョまで陸路をとりました。そしてこの仕方で、イタリアの「長靴」の底の凹みから爪先まで大した距離のあることを悟りました。急行で12時間以上かかるのです！もちろんその間ずつと美しい——時としてひじょうに美しい海岸に沿って走ります。そして道中はメタポント、シバリス、クロトーネ、ロクリ等々、ギリシアへの追憶がいっぱいです。私がこれまでに受けたもっとも強烈な印象の一つはシチリアの出現です。夜明けから空は澄み、光は明るく、海は薄青<sup>うすあお</sup>でした。しかしもう少し南下しますと、はるか背景ににわかにかたい、恐ろしい。青味を帯びた雷雲がかたまりました。そして海は光と輝きを失い、鉛色になります。突然、前山の角のところに雷雲にかこまれてあの神聖な島が浮かび出ます——山と岩との巨塊をなし、どす黒く、雷雲をいただき、イマジネーションがこの光景に与えたすべてによって更に偉大な姿をみせながら。すぐさま私は——まるでギリシア人のように——シチリアを巨人とキュクロプス<sup>サイクス</sup> 1)と巨神たちの住まう国にし



た、あの古い伝説を感じたのです。たとえポリュフェーモス<sup>2)</sup>が雲の裂け目から現われたとしても、私は驚きはしなかったでしょう。

それ以来、私は神話と追憶の世界に生きています——過去の遺物に触れることを好まぬこの私ですが、しかしその過去がギリシアの過去である場合には、それはひとりでに私の魂のなかに立ちのぼって来ます。なぜならそれは消失したのではなく、不死のものとして生きつづけているのです。——この自然のそよぎの中に、波の息づかいの中に、そしてエトナの神々しい威厳の中に。ここでアイスキュロスとプラトン、エンペドクレスとピンダロスが生きていたのです。オデュッセウスはここを通りすぎました。ここでアキスはガラティアを愛し、彼女から愛されました<sup>3)</sup>。シュラクサイ [シラクサ]、セリヌース [セリヌンテ]、アクラガス [アグリジェント] がここで栄えたのです。そしてそれらが滅びのを見たエトナは今も生きています。もしかすると、私が吸い、これらの植物が吸っているこの大気の中には、エンペドクレスの灰が漂っているかも知れません。——私は幸福です。

メッシーナを見物しました。海峡は大きな河ほどの幅ですが、けわしい山々に傾され、町々で縁どられています。メッシーナの地勢は素敵ですが、町そのものは大して面白くありません。それでも私は大変な苦勞（官庁を動かしたり、市役所に走ったりする等々）をして、アントネルロ・ダ・メッシーナ<sup>4)</sup>の絵を5枚見つけました。この素晴らしい画家のものとしては、ルーヴル博物館にある備兵隊長の頭部とボルゲーゼ絵画館<sup>5)</sup>の肖像画が1枚知られているだけです。これら5枚の絵はひじょうに美しく、同時に古ヴェネチアと古フランドルの絵画の要素もっています。

メッシーナからタオルミーナへ鉄道は海岸づたいに走ります——奇妙な植物、オレンジとレモンの森、刺のあるイチジクの木からなる山にかこまれて。渚には打寄せる波から数歩はなれたところに、眠ったり飛びはねたりする山羊の群がいます。これを見るとテオクリトス<sup>6)</sup>を思い出します。タオルミーナの停車場から町へは馬車で45分かかります。眺望は無限にひろがり、壮麗をきわめます。視線はメッシーナの海峡からシラクサの岬へ、また [本土の] カラブリアの海岸からエトナの巨大な岩塊へと走ります。ギリシア劇場がその一帯を領しています。そしてそれより更に高くに位置したモーラ [の村落]——古えのアクロポリスの奇岩もそうです。

それはまるで深淵に懸かった鷺の巣さながらです。変わりやすい天候にもかかわらず私は青、橙、黄金の見事な色調をみせる素晴らしい日役を味わいました。エトナの白い塊は、バラ色の雲が変化して燃える緋色にいたるまで様々のニュアンスをみせる中を、それを背景にしてくっきり浮かび上がります。小さなホテル「ヴィクトリア」〔ヴィクトリア〕は優雅で、上品で、清潔で、とても好感がもてます。ただ一つの欠点、汚点——それはイギリス人とドイツ人が多すぎることです。私はドイツ人がとても好きですが、ドイツ人の旅行客はあまり好きではありません。ことに食卓には多感をよそおう若い娘が一人、詩人氣取りの青年が一人いました。どちらも不似合なことをやっているのです。そして食事の終わりには、マンドリンを弾く連中がやって来ました。エトナを前にしてこれでは情なくなります。他には人間はあまり見ません。このホテルはごく小さいのですが、タオルミーナには外国人が大勢いるようです。シラクサのホテルはどれも満員とか。

あなたの2通のお手紙は届いています。したい友、あなたにお礼を——心からお礼を申しあげます。『オルシーノ』や実的な問題のことはすっかり忘れていました。急いで一言し、その後はもう考えないことにしましょう。学位論文を私がどうすればよいのです？ なぜ私が学位論文を書かねばならないのですか？ 私は学位論文を書かないでしょう。これは確かです。私が教師にはならないという事実よりも確かかも知れません。今の『サルヴィアータ』<sup>7)</sup>が終われば、私は生涯けて記録保管所の文書に首をつっこむことはありません。私はこれを憎みます。

「フリードリヒ二世を甦えらせるのは何と面白いことか！」と世間がいうのは、まことに結構です。しかし歴史家にとっては、これは数年間、過去の塵まみれの手写本やがらくたの中で片時も休まず仕事をするを意味します。こんな献身的な精進をする力はこの私にはありません。フリードリヒ二世にしろ、またこの世ですでに生き終えた誰にしろ、私が自分の生涯の何年かを捧げるまでにその人物を愛することはありません。ついでながら、これはまったくの笑い草です。それをして何が私のものになるのでしょうか。博士の称号でしょうか？

大した魅力です！ 博士！ 称号がもう一つ、〔証書の〕羊皮紙がもう一枚——国家がこれまで私に掛けた何枚かに更に重ねられるロバの皮一枚。そしてどんな生

存の権利があるというのです？ もし私が教師になるつもりなら、それは私の昇進の役に立つでしょう。しかし博士というものは、高校一級教諭（たとえローマ学院の所属であろうとも）と同様に、フランスでは、若い愚物どもに——自分の幸福のために、或は不幸のために吸収した——精神の糧を提供する場合にしか生存の権利をもたないのです。いや実際、人びとは私に不信をいだいており、私が自分の過去を考慮に入れるよう望んでいます。しかし私は自分の過去を思うとぞっとします。なぜとって過去は私に苦しみをもたらしましたし、私は苦しむのがいやなのです。ことに、過去から一つの強制力となって未来にまで届き、習慣の鎖をいっそう重くするような一切のものを思うと、私はぞっとします。習慣と私がいうのは、奴隷であることの習慣です。そして今後、私の魂はその鎖をふるい落とせるほど若く、強くあるとは限りません。

昨夏、あなたのいらっしゃるところで皆がヴィリエ・ド・リラダンの或るドラマ<sup>8)</sup>について興じたことがあります。その女主人公は彼女にはふさわしくない男性を夫にさせられた高貴な女性です。彼女はその厭うべき絆を絶ち切ろうと決心します。しかし良心的な彼女は次第に日常生活のさまざまな義務に服従するようになります。ついに彼女は宣言し、関係を絶ち、立ち去ります。——しかし、やっぱり戻ってくるのです。というのは彼女は自由であることを忘れてしまったのです。彼女は奴隷でいるほかはありません。それが彼女には当然なのです。

私は奴隷ではありたくありません。

心からあなたを愛します、したい友！

ロマン・ロラン

## 注

- 1) 海神ポセイドンを父とする一眼の巨人。ふつう三人とされ、シチリア島で羊を飼っていた。
- 2) キュクロプスのひとり。『オデュッセイア』9巻を参照
- 3) ガラティアは美しい海のニンフ、牧人アキスはその恋人。ガラティアへの恋に狂ったポリュフェーモスは二人が眠っているのを見て、エトナ山の巨岩でもってアキスを打ち

砕くが、アキスはガラテアの願いにより河神に姿を変えられた。エトナ山のみもとを流れるアチス川の名はこれに由来する。

- 4) 15世紀後半。彼は長年オランダに滞在し、その後ヴェネチアで仕事をした。
- 5) ヴイラ・ボルゲーゼの一部をなす、ローマ有数の美術館
- 6) 前3世紀シラクサに生まれた牧歌詩人
- 7) 『ユニテ』4, p20の注1)参照。
- 8) 『反逆』La Révolte (1870)のこと

### Ⅲ ロランからマルヴィーダへ

パレルモにて

1891年2月18日、水曜日の夕方から

19日、木曜日の朝まで

したい友、私にまったく黙っておられるとは、何とひどい話ではありませんか？あなたが苦しんでいること、あなたが病気であることを私におっしゃらないのでは、これから先どうして私は安心していられるでしょう。友人に自分の肉体の苦しみを隠すことは、魂の苦しみを見せないこと（あなたはそれで私を非難なさったのですが）よりも高貴なのでしょうか？あなたに電報を打ちましたが、まだお返事はありません。私は心配です。よい知らせがあってもやはり心配です。よい知らせでないなら、いよいよ心配です。私たちの間に海の横たわるのを見ますと、自分がどれほど遠くあなたから離れているかを感じます（とくに嵐の海では）。

いつもあなたは「創造すること」(das Schaffen)の幸福を説かれます。その理由は——結局のところ——私には分かります。あなたはお望みなのです——ほかの思念やほかの心配によって散漫になる私の生活がすっかり創造行為のなかに没入することを。したい友、創造行為が最大の幸福を意味するとは言わないで下さい。私にとって創造行為は最大の必然なのです。ちなみに私のなかの一切は自然的に必

然です。私は意志します、たえず意志します。そして私が意志するすべてを実行できないことに憤激します。もし私にそれが実行できるなら、その時には私はもっと多くを願います。私は満足するでしょうが、幸福であることはないでしょう。私が幸福であるのは——完全に幸福であるのは、私がもう思考しないで、私のうちに私の自我が何一つ残らず、ただあるのは他の者たち——私のいない世界だけという場合、つまり、私が澄んだ空気——オリーブの尖った小枝の間を、ギリシア神殿の崩れた円柱の間を、愛するやさしい空の下を、諧音をたててざわめく海の上を渡るあの純粋な空気になる場合だけです。私が私自身ではない時——その時、私は幸福なのです。私の自我が完全に幸福であることは決してないでしょう。しかしこのことは重要ではありません。幸福は二義的なものです。本質的なのは、私の自我が生きなければならぬということです。

昨日はすっかり自分を忘れたため私は幸福でした。しかし、まずその前に——先日の手紙ではどこでお別れしたのでしょうか？ シラクサだったと思います。この古代の町が私に与えた深い印象についてお話したのでしょうか？ いや、これについては語り合うことがあるでしょう。たしか私は、私がこれほど愛している自然が私にたいしてどんなに不快な態度をみせたかを申ししたいと思います。しかし私の愛するエンペドクレスはそんな思知らずではありませんでした。彼は彼のアグリジェント〔古えのアクラガス〕をその最も美しい光で飾っておいてくれました。そして昨日という日は素晴らしい夢のように永遠に私の心のなかに生きることでしょう。私は数時間というものの一つの理想的な世界のなかで暮しました。そして私のまわりの一切、私のなかの一切はギリシア的でした——やさしい空、きらきら光る波、遠方の広々した緑の平地を疾駆する馬の群、神殿、石壁、古代ふうの壺で飲み水をすすめてくれた若い娘、青味を帯びたオリーブ、花咲くアーモンドの樹、エンペドクレスへの回想。私の悲劇<sup>1)</sup>のなかで私はこの風景を部分的には正しく推測したことになります。しかし部分的にはひどく間違いました。このことに腹が立ちます。私は夢想されたアグリジェント〔アクラガス〕を建てなおさざるをえないのです。アグリジェントからはエトナが見えないとしても、私としては仕方のないことです。エンペドクレスは——そして他の人びとも、やはりエトナを見なければなりません。

エトナがあのだらま全体を支配しなければならないのです。正直のところ私はエトナに少々失望しました。私はエトナをもっと大きく想像していたのです。大きいのはタオルミーナから見た場合だけです。これに反し、古代ギリシアの遺跡はたえず私の期待を上回りました。たとえば今朝ほど私はパレルモの博物館でセリヌンテの「ドーリス式神殿の」小間壁を見て、とても大きな喜びを味わいました。

(— — —) 私はあまりに多くのものを、しかもその一つ、一つをひじょうな情熱をもって見たため、少しばかり頭がぐらぐらしています。なかでもシチリアでの印象の並はずれた多様性については、想像なさることができないでしょう。ギリシアの神殿からモンレアーレの寺院<sup>2)</sup>まで、またアントネルロ・ダ・メッシーナからセリヌンテの小間壁まで、そしてまた噴煙を吐くエトナからパリを思わせる都市「パレルモ」まで。こんなに短期間には多すぎます。

心からあなたを抱擁します。今あなたの電報を受け取ったところです。「いちじるしく好転」ではまだまだ足りません。少なくとも、私にそう思わせようとなさるのではないでしょうね？

ロマン・ロラン

私がいなくて病気になろうとされたのなら、とくに私が帰ることのために丈夫になって下さい。

#### 注

- 1) オでにシチリア旅行以前に書かれた戯曲『エンペドクレス』。
- 2) パレルモの近郊モンレアーレの大寺院は12世紀後半、ノルマン王ギョーム二世により建立され、サラセンの様式も観察される。内部のモザイク装飾はとくに有名である。

## ＜訳者あとがき＞

1891年2月はじめ、ロランは南イタリアとシチリア島へ2、3週間の旅行を試みた。(途中まで数名の留学生が同行。)これらの地は古い時代にはギリシアの植民地として栄えたところであり、さらにシチリア島は昔から地中海交通の要衝として、サラセン人(9-10世紀)やノルマン人(11-12世紀)の支配を受け、その文化的遺産は多彩をきわめている。こうして若いロランは、南方の美しい自然を味わいながら、ヨーロッパ文化のゆたかな根源にじかに触れることになった。この貴重な体験が人間として、芸術家としての彼の成長に重要な意味をもったことは言うまでもない。

南大路 振一

## ふらんす随想 50年

—— そのI ——

宮本正清

「ロマン・ロランとの出会いについて承りたいのですが……」あまりにもたびたび接してきた、平凡でしかも大事な、時には重要なポイントに触れているかも知れない問題によるこんで私は答えた。早稲田の講義で私の師、吉江喬松<sup>たか</sup>先生は、文学者について、或る作品について、フランス精神、気質、国民性ということに言及された。そうした名称を用いるものがわれわれ日本の作家や文学作品に必ず含まれているだろうか？ 私は図書館に入って、たくさんの本を借りた。いずれも部厚い、

金文字入りの書籍だった。しかし私はそこに私の内心の質問への回答を見出しかねた。目的なしに、序に借りてみた翻訳本、ロマン・ロラン原作、後藤末雄氏訳の『ジャン・クリストフ』と題された長篇小説があった。大河小説という名称がやがて生れてきたこの長篇小説の主人公の貧しい、孤独な、しかも勇氣に溢れる生き方は、四国の山村に生れ、成長してきた私には魅力があった。中学時代に、酔ったように読んだことのある『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『レ・ミゼラブル』にささげた情熱と感謝がもう一度戻ってきた。

それから？ それから後の私の学生生活はクリストフの子分にすぎなかった。原文でそれを読みたくなった。私は吉江先生の研究室を訪れて、クリストフの幼少年時代をゆるいテンポで読み終ると、第三巻、第四巻と読みつづけた。そして、第十巻「新しい日」をもって終ると共に、卒論はロマン・ロランと内定した。しかしその決定は私ひとりの内定だった。「卒論」について、未決定のこと、十分わからないこと……なんでもよいから私の許まで相談にくるように……そうになると、なおさらその勇氣がなくなった、が結局「ロマン・ロランにおける人間信頼と人間愛」を私は書いた。卒業生七名、先生に教えを乞うた者は一人もなかった、そして、みんな一様にきびしい、愛情のこもった叱責をうけた……どうもそれは避けがたいことらしい。後年、私も自分の教え子に同じ忠告をしたが、一、二を除いて実らなかつた。

大学院の二年を終えた私は偶然の縁のお蔭で京都に移り住むことになった。詩人ポール・クローデルが大使として東京に来任したのは私たちの卒業に先んじていた。旧日仏会館で、詩人劇作家のシャルル・ヴィルドラックがポール・ヴェルレーヌについて語ったのもその頃で、ユーモラスな大使の通訳をした山内義雄氏もまたクローデルに愛されていた。京に住む日本画家、竹内栖鳳や富田溪仙の私邸に招かれたり、仏和の訳に練達の士である山内氏のような人を伴って、京の古い伝統的な料理を味わうのも、クローデルのアジア趣味を満足させたにちがいない。

全く偶然の機会に、私たちのクラスのためにいっしょに現代劇を読んでくださつた五来欣造先生ごらいきんぞうの紹介で親しくなったフランスの青年地理学者フランシス・ルエラン氏の努力から、関西日仏学館(Institut Franco-Japonais du Kansai)と称する学院が、程なく生れることになったのであった。 ※日本最初の政治学博士



この小さいフランス風の学校が出来あがるまでには、ルエラン氏夫妻といっしょに何かと忙しい思いをしたこともほとんど五十年の昔、半世紀が過ぎ去った。

## ユニテの広場

ロマン・ロランセミナーに参加して

塚本晴子

私が参加させて頂くきっかけとなったのは、大変浅はかなことで、“左京区”何かこのあたりで私を教え導いて下さる教場といったものはないかしら……と夢想していたことと、ロマン・ロランセミナーという美しい響きの名と、『魅せられたる魂』という題名に魅かれて、です。

今までに読んだ著作は、『ベートーヴェンの生涯』他、会で読むこととなった偉人の伝記などです。私も小さな環境で、幾人かの人々とつながりを持ち、その人達との関係の仕方で悩みながら日々を過ごしています。人との対応から、じぶんの中に、恐ろしいものが潜んでいるということに気づかされるこの頃です。良さそうなものは、人から奪ってでも得ようとする、人が救いを求めていらっしやるのに自分の環境を固守する為に助力せぬ薄情さ、思っていることを率直に表現せぬ臆病さ、異性への切なる願望。今までは、そういう澄んでいないものは無い方が、人間関係がさしさわりなく運ばれると思ひ、人にも自分の中にも見ようとしなくて来ました。しかし、現実の社会を、確かに生きてゆくには、人間のありのままの姿を知ることが、まずその入口ではないかしら、と最近思っています。じぶんも持つ色々な欲望、それをどれだけ知ることができるだろうか……。小心な私は逃げ腰であるようです。そしてその認め方、受け入れ方を、ロマン・ロランの言葉と、会の皆様のご発言から、考え考えしながら、迷い置きながら、私も歩いて参りたいと思っ

おります。

## 友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会例会は、現在までに通算 241 回をかぞえています。その活動状況は下記のとおりです。

1978 年 4 月 22 日（土）

237 回例会

第 62 回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：「ベートーベンの生涯」

発表者 塚本 晴子

出席者 12 名

“運命”“月光の曲”などを子供心に強い印象できいたという記憶から、この本を読んでの、ベートーベンの悲運、悲惨さに立ち向う克己心の強さに打たれたという感想を述べられた。ロマン・ロランは涙とともに読んだという人が多いけれど、この発表者は大変幸せな環境にいて、未だそういう読み方ができないのではないかと宮本先生の御講評があった。

5 月 27 日（土）

238 回例会

第 63 回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：「ミケランジェロの生涯」

発表者 特定せず波多野茂称先生の解説をきく

出席者 18名

ロラン自身、ベートーベンとミケランジェロの両生涯の余りのちがいの大きさにおどろき、あれ程力に満ち溢れた作品の作者の、意志の弱い意外な面に出くわして、こういう人物のこういう生涯を語ることが本当に苦しみ戦っている人を鼓舞することになるのか、と悩んだ。しかし境遇の上から来た悲惨や自己分裂に耐えて、内面で苦しむ人が自分と同じようにいる、ということだけでも人は慰められる。ロランはよく知らないままにミケランジェロを書き出したが、書き終ってやっと全的な理解に到った。ゴットフリート叔父さんの *ombre vie heroïque* と相通じる精神なのだ、と伺い、感銘を新たにす思いであった。

6月24日(土)

239回例会

第64回 ロマン・ロランセミナー

テーマ: 「トルストイの生涯」

発表者 佐々木 邦彦

出席者 18名

トルストイの特徴として 1) 絶対的な誠実さ、2) 自己分析  
3) 人間に対する愛、の三点を挙げ宗教的危機を通過したあとは、知力を奮いおこして他者への愛に生きようとしたトルストイを、“戦争と平和”などの作品にも触れながらロランの目を通して真剣に見つめる好発表であった。

9月30日(土)

240回例会

第65回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： 「マハトマ・ガンジー」

発表者 田中 実

出席者 19名

篤心なヒンジー教徒であったガンジーが使命観から止むなく政治家となり、非暴力の信念を貫いた生涯は、ユニバーサルで調和のとれた理性を持つ点でロランと共通性を持ちながら、しかも一歩進んで政治に身を投じた行動力において、ロランを感嘆させたのである、とよく練られた発表で会員からの発言も多く熱気に満ちたセミナーであった。

10月28日(土)

241 回例会

第 66 回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： 「ミレー」

発表者 大橋 哲夫

出席者 21名

ミレーの思想は著述家、行動家の思想である、とロランはいうが、貧困の苦しみ自体を喜びとするキリスト教的な精神の中で描いた農民画家である。日本における作品理解の根源になっているのがロランのミレーである。とクリスチャンである大橋氏はミレー画集を回覧しながら、画面の中に漂っている不変なもの、永遠なものをミレーの汎神論という人もある、と真摯に話され、ミレーの画に一層惹きつけられるのおぼえた。

## あ と が き

最近のセミナーでTさんが《ロランは『戦いを超えて』の時代の中で、なぜあれほどの公正かつ勇氣ある精神性を保ち得たのだろうか》と発言された。第一次世界大戦時の《満場一致の戦争賛成》の嵐が荒れ狂う中で、ひとり、ロランはこれに抗して戦い、憎悪と罵声を浴びていた。そして人間性の限界を見きわめ、あるときは《少女のように泣きたい》気持ちにかられながらも、傍観者であることを拒否して、不正な戦争との闘いに挺身しつづけた。そしてなお、孤高を持し、決して希望を失わなかった魂の秘密は何か。ロランは歴史と芸術の世界に精通していたから、人間というものが見えていたのだろうか？しかしそれは《さめた目》というようなものではなかった。ともあれすでに次のようなすばらしい指摘がある。《彼の政治的世界への発言には、党派的偏見をはなれながら、しかも人類の未来に全的な責任を引きうけようと決心した人間だけが持っている正しさがあると思う。》（日高六郎先生）——世界は、今日、昨日に劣らずロランの精神を必要としている。

相浦先生は、過日、ご療養中にもかかわらず論文「ロマン・ロランと魯迅『阿Q正伝』」を他のお仕事に優先させ、訳してお寄せ下さった。（これは先生の「ロマン・ロランと中国文学」（ユニテ6号）の続編の性格をもちます。）それにしても本誌のような性質の小冊子に、名利をはなれて進んでお仕事を提供されるご好意ほど嬉しいことはない。南大路先生の「ロラン＝マルヴィエール往復書簡」は本来なら前号に一括掲載すべきものを、都合により分載したものである（前号とのつながりにご注意ください）。宮本先生から、長い歴史の、貴重な一コマを随想文としていただいた。宮本先生とロランの出会いについて、今回初めて知られる読者も多いのではないだろうか。塚本さんは、セミナーに出席される方のうちでも、特に清楚で謙虚な印象を与える方だ。

今回から、付録として当研究所の図書目録を連載する。ユニテが一読のあとも資料として役立つことを願い、あわせて研究所の紹介をも目的とした。

（編集部 織田 和夫）



## 投 稿 歓 迎

- ▲ ロマン・ロラン友の会の会員であれば、誰でも自由に投稿できます。現在のところ枚数の制限はしておりませんので、何枚書いて下さっても結構です。ただし、掲載の都合で何回かに分けたり、適当に削ったりすることがありますので、ご承知ください。
- ▲ 原稿は必ず、400字詰、または200字詰の原稿用紙に横書きにして、ロマン・ロラン研究所あてにお送り下さい。
- ▲ 締切り日は特にもうけておりません。年2回発行を原則としておりますので、随時、お送り下さい。
- ▲ 原稿を掲載した方には、原稿料に代えて、当該「ユニテ」を3部贈呈いたします。

「ユニテ」編集部

ロマン・ロランセミナー

日 時 毎月第4土曜日 午後7時～9時

場 所 ロマン・ロラン研究所

会 費 300円

講 師 宮本 正清先生・波多野茂称先生

(参加自由)

主催 ロマン・ロラン研究所

ユニテ 第3期 第8号

発行日 1978年10月31日

発行所 財団法人 ロマン・ロラン研究所  
京都市左京区銀閣寺前町32  
TEL(075) 771-3281

印刷所 昭和堂印刷所  
京都市左京区百万辺交差点

- /RR/1/1/ Rolland, Romain: Jean-Christophe. Edition Définitive.  
(éd. Albin Michel, Paris, 1950)
- /RR/1/2/ Rolland, Romain: Jean-Christophe I. l'Aube. (Librairie  
P. Ollendorff, Paris, sans date)
- /RR/1/3/ Rolland, Romain: Jean-Christophe II. le Matin. (Librairie  
Paul Ollendorff, Paris, sans date)
- /RR/1/4/ Rolland, Romain: Jean-Christophe III. l'Adolescent.  
(Librairie Ollendorff, Paris, sans date)
- /RR/1/5/ Rolland, Romain: Jean-Christophe IV. la Révolte.  
(Librairie Ollendorff, Paris, sans date)
- /RR/1/6/ Rolland, Romain: Jean-Christophe V. la Poire sur la Place.  
(Librairie Ollendorff, Paris, sans date)
- /RR/1/7/ Rolland, Romain: Jean-Christophe VI. Antoinette. (Librairie  
P. Ollendorff, Paris, sans date)
- /RR/1/8/ Rolland, Romain: Jean-Christophe VII. dans la Maison.  
(Librairie P. Ollendorff, sans date)
- /RR/1/9/ Rolland, Romain: Jean-Christophe VIII. les Amies. (Librairie  
P. Ollendorff, Paris, sans date)
- /RR/1/10/ Rolland, Romain: Jean-Christophe IX. le Buisson Ardent.  
(Librairie P. Ollendorff, Paris, sans date)
- /RR/1/11/ Rolland, Romain: Jean-Christophe X. la Nouvelle Journée.  
(Librairie P. Ollendorff, Paris, sans date)
- /RR/1/12/ Rolland, Romain: Antoinette. (éd. Albin Michel, Paris, 1923)
- /RR/1/13/ Rolland, Romain: Colas Breugnon. (Ollendorff, Paris)
- /RR/1/14/ Rolland, Romain: Colas Breugnon. (Ed. Georges Guillot,  
Paris, 1949)
- /RR/1/15/ Rolland, Romain: Colas Breugnon. (Ed. "Connaitre", Genève)
- /RR/1/16/ Rolland, Romain: Colas Breugnon. (Ed. Garamond, Paris)
- /RR/1/17/ Rolland, Romain: Colas Breugnon. (A. Michel, Paris)
- /RR/1/18/ Rolland, Romain: Colas Breugnon. (A. Michel, Paris)
- /RR/1/19/ Rolland, Romain: Clerambault - Histoire d'une Conscience  
Libre pendant la Guerre. (Ollendorff, Paris)
- /RR/1/20/ Rolland, Romain: Clerambault - Histoire d'une Conscience  
Libre pendant la Guerre. (Ollendorff, Paris)
- /RR/1/21/ Rolland, Romain: Pierre et Luce. (Ollendorff, Paris)
- /RR/1/22/ Rolland, Romain: Pierre et Luce. (A. Michel, Paris, 1958)
- /RR/1/23/ Rolland, Romain: L'Amé Enchantée. (A. Michel, Paris, 1959)
- /RR/1/24/ Rolland, Romain: L'Amé Enchantée. 4. l'Annonciatrice (Anna  
Nuncia). (A. Michel, Paris)
- /RR/1/25/ Rolland, Romain: L'Amé Enchantée II. l'Été. (A. Michel,  
Paris)
- /RR/1/26/ Rolland, Romain: L'Amé Enchantée III. Mère et Fils.  
(A. Michel, Paris)
- /RR/1/27/ Rolland, Romain: L'Amé Enchantée IV. l'Annonciatrice (Anna  
Nuncia).



- /RR/1/28/ Rolland, Romain: L'Ame Enchantée. IV. L'Annonciatrice (Anna Nuncia) (A. Michel, Paris)
- /RR/1/29/ Rolland, Romain: Annette et Sylvie. (éd. Hier et Aujourd'hui, Paris, 1946)
- /RR/1/30/ Rolland, Romain: L'Ame Enchantée: Annette et Sylvie; L'Été; Mère et Fils. (Moscou, 1955)
- /RR/1/31/ Rolland, Romain: L'Ame Enchantée L'Annonciatrice. (Moscou, 1955)
- /RR/1/32/ Rolland, Romain: Les Tragédies de la Foi, Saint Louis Aërt; Le Triomphe de la Raison. (Librairie Ollendorff, Paris)
- /RR/1/33/ Rolland, Romain: Les Tragédies de la Foi, Saint Louis Aërt; Le Triomphe de la Raison. (Albin Michel, Paris)
- /RR/1/34/ Rolland, Romain: Aërt Drame en Trois Actes. (A. bin Michel, Paris)
- /RR/1/35/ Rolland, Romain: Théâtre de la révolution: Le 14 juillet; Danton; Les Loues. (Librairie P. Ollendorff, Paris)
- /RR/1/36/ Rolland, Romain: Le Temos Viendra. (Librairie P. Ollendorff, Paris, 1903)
- /RR/1/37/ Rolland, Romain: Liluli. Illustration d'après les bois de FRANS MASCREEL (Librairie Ollendorff, Paris, 1918)
- /RR/1/38/ Rolland, Romain: Les Vaincus. (Ed. "Lumière" Avenue d'Amérique, Anvers, 1922)
- /RR/1/39/ Rolland, Romain: Le Jeu de L'Amour et de la Mort. (Albin, Michel, Paris, 1925)
- /RR/1/40/ Rolland, Romain: Les Leonides. (Albin Michel, Paris, 1928)
- /RR/1/41/ Rolland, Romain: Paques Fleuries. (A. bin Michel, Paris, 1926)
- /RR/1/42/ Rolland, Romain: Paques Fleuries. (Editions du Sablier, Paris, 1926)
- /RR/1/43/ Rolland, Romain: Théâtre de la Révolution: Robespierre. (A. Michel, Paris, 1939)
- /RR/1/44/ Rolland, Romain: Robespierre. (Albin Michel, Paris, 1939)
- /RR/1/45/ Rolland, Romain: La Révolte des Machines ou la Pensée Déchainée. (éd. Pierre Vorms, Paris, 1947)
- /RR/1/46/ Rolland, Romain: La Vie de Tolstoï. (Librairie Hachette, Paris, 1928)
- /RR/1/47-1/ Rolland, Romain: Vie de Tolstoï. (Librairie Hachette, Paris, 1921)
- /RR/1/47-2/ Rolland, Romain: Vie de Michel-Ange. (Librairie Hachette, Paris, 1920)
- /RR/1/48/ Rolland, Romain: Millet. (Duckworth, London)
- /RR/1/49/ Rolland, Romain: Mahatma Gandhi. (Librairie Stock, Paris, 1924)
- /RR/1/50/ Rolland, Romain: La Vie de Ramakrishna. (Stock, Paris)
- /RR/1/51/ Rolland, Romain: La Vie de Ramakrishna. (Stock, Paris, 1952)
- /RR/1/52/ Rolland, Romain: La Vie de Vivekananda et L'évangile Universel II. (Librairie Stock, Paris, 1930)

吉田 秀和

ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』は音楽家を主人公に、彼の人格の発展、高まりと揺がりと深まりを通して、音楽が一方では人間の内面の世界の十全な表現になることを示すと同時に、他方では、彼ひとりのものでなく、人生の行路で彼と交わった人びとから、もっと広い人間の集団とお互いに影響し働きかけ合う力の生きる場でもあることを証明しようとした試みである。ここでは、音楽は非常に内的で親密で個人的な祈りや独白から極度に広く大きな呼びかけと共鳴にまで広がる芸術として祝福される。私はこの小説を二十年以上前に読んだきりだが、クリストフが星のきらめく宇宙の法則と一体となった音楽をききつつ死んでゆく場面は忘れられない。音楽を通じて、人間もその中に含むが、同時にそれをはるかに越えた大きな宇宙との神秘的な交感を実現する。音楽は個人の創造であると同時に万有に共通する法則の顕現でもある。これもロマン主義者好みの主題だが、ロランでは、この思想は十八世紀ヨーロッパ文化の精華ともいべき理想主義的ヒューマニズムの伝統に根ざしていた。「大空の星と内なる心を共通して支配する秩序」カントがここに道德の究極のよりどころを求め、ベートーヴェンとロランがそれを音楽を通じて確認したがったとすれば現代の文学は、そこにまったく別の光を照射する。